

引揚者体験の一断片

北海道 佐藤 甚之助

昭和十五年五月当時の国策であり、また国内の不況のため就職難時代であったので大陸を目指し知人を頼って渡満した。

北满牡丹江市在住の古村木材(株)に入社した。昭和十八年汪清県金蒼街に転居して製材業を営んでいた。

昭和二十年八月一日現地召集令状をうけて満州第一五二六部隊(通化)の高梁阜幕舎に入隊した。兵器も支給されず何の装備もなく、ただごろごろしていたので敗戦末期を感じていた。

八月九日ソ連軍がソ満国境を越境進攻して来たと報じられて緊張した。

同月十五日正午重大ニュースあるとのことで、高梁阜の中に高い竿を立て、それにラジオをぶら下げ、その周囲に部隊長以下千人が集合してそのニュースを聞いた。

それが本国からの終戦の詔勅、戦争集結無条件降伏の放送であった。部隊長以下腰抜けのようになってその場に座ってしまった。

翌朝点呼時の兵員は部隊長共三百人で、他の七百人は行先不明となっていた。九月中旬頃ソ連進駐軍に武装解除され進駐軍の指揮下におかれた。十月中旬頃ソ連軍命令により吉林市に集結(目的は元日本兵は寒くならないうちにウラジオストク經由本国へ帰す)させらるも、輸送途中梅化溝駅構内で大休止して吉林の情報偵察したところ、完全に捕虜となることであった。そこで部隊長は独断で兵に自由解放を命じ、後の責任は本職がとると言われた。

大陸のしかも敵中の自由行動はいかにすべきか、一時途方にくれたところが偶然にも同駅構内に元金蒼駅長の佐々木さんが単身疎開。貨車の中に仮住いしていた私を発見してくれたので大変心強く思った。いろいろと懇請したところ、それでは行動を共にしようかと快諾してくれた。早速満鉄職員の被服や身分証明書を用意作製していただき変装が出来てほんとうにありがたく感謝した。

その数日後当地の状況が悪化して危険と判断して新京を目ざして脱出、ソ連進駐軍の厳しい監視の目をくぐり貨車の中や、椅子の下にかくれるなど危険を冒しながら新京にたどり着いた。その後一人は個別に家族を探すとで別れた。

私は元牡丹江市在住の知人古村啓太郎さんの避難先を探し求めて歩き、二、三日がかりで探しあて、体面が出来るいろいろと懇請の上仮住い同居方お願いした。その後私は召集時金蒼街に残して来た妻子の安否を気遣い一日も早く探し再会に奔走専念した。

毎日奥地からの避難民の行動と情報を求めて歩き廻りつづけた。あるとき新京市内の路上で手相占師のおばさんに無料で占っていたこともあり、大いに参考資料としてその後の行動に役立ったので今でも感謝している。

十月下旬新京駅を出発吉林に向かった列車内で進駐軍の日本人狩に遭遇するも満鉄職員の身分故、難を逃れた。これ天の助けと感謝した。吉林に到着各難民収容所を探し歩くも妻子見当らず困りはてていたとき、元在郷

軍人会での知人が来て妻子が吉林駅前の広場の集団難民の中にいると知らせてくれたのでかけつけた。

吉林駅前の集団難民の中から妻子五人を発見した。着の身着のままただ再会出来たこと天に感謝した。妻は避難途中出産して子供四人になっていた。その後新京に連れ戻り古村さんに懇請して家族全員の同居生活を承諾いただいた。それから引揚げまでの生活は並々でなかった。特に寒中の越冬は人間らしい生活ではなかった。四歳の男の子は悪病にかかり手当てのすべなく死亡近くの高粱畠に埋めて来た。

昭和二十一年六月本国から引揚命令があり旧関東州コ口島港乗船博多港上陸した。あゝ祖国日本があったと喜んだ。一路釧路に向い同年七月三十日頃目的地釧路駅頭へ下車。私以下家族五人着のまま無一文でただ天を仰ぐばかりだった。ただ祖国があり家族が無事引揚げ出来たことに感謝を惜しまない。これから第二の人生へ再出発と心に誓った。